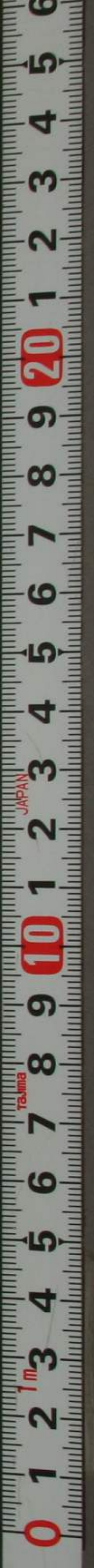




里見八犬傳 拾三編 卷廿八



~18  
709  
76



門遠 13  
 第 709  
 卷 76



明治三十八年  
 十月九日  
 購求

南總里見八犬傳第九輯卷之二十八

東都 曲亭主人編次

第百四十四回

大江前諾々関符を請ふ  
 澄月が一謀五虎を讖ま

政元既余市を誅して敢其身の愆を飾り欲されども室町殿の御氣色の  
 稍思得し其あはれ猛可使者を遣して京都の五虎とせざる秋篠將曹廣當澄月  
 香車八直道等並鞍馬海傳真賢を敵齋經緯と家臣種子嶋中太正告  
 紀内鬼平五景紀を召聚る秋篠廣當那虎の防禦として北面武士皆悉朝廷を  
 守護しなれば暇ありとて招はよ心せし又澄月直道の曩ふ大江親兵衛と閉槍法小  
 毫も克はぬ刺幫助ふは鬼平五が未熟疎忽の礫打れて落馬する折の為体を

八犬傳九輯卷之二十八

曲亭主人編次

京童が曲子を作て、謠ひ隠さくもあまの故の宮中の沙汰を憚りて、身の撲傷を愈えども、  
を儘病癒の假托に、尚屏居に在り、亦政元の招承を承せ、餘真賢、経緯を  
正告と景紀の異議を早く参り、登時政元對面して、みづから宣示せり、白川山を  
靈虎の事の趣、汝も及び、我既洛外を、獵戸を召課、獵捉せむ欲ふ、  
他者、只渡世の弓前、鍊砲あり、武藝胆勇の者、あざされ、傷損ありて、寸功を、あをりて  
汝も、今命を、あまの毛を、以て、各鍊砲を、捷れる、列卒二十名を、從へて、俱、那山を、求獵得て  
大功あり、先度の恥を、雪る、不足り、と、おられて、驚く、似、而非、猛者、們的、憶、目と、目を、注、  
答難、る、中、の、真賢と、経緯の、權、且、して、俱、あ、り、御、説、美、の、い、ふ、も、那、虎、の、真、物、あ  
らぬ、故、る、画、圖、の、化、る、る、力、と、て、征、ら、る、ら、鄙、語、云、餅、の、餅、師、あ、て、山、獵、と、り、く、生  
活、も、ま、る、獵、戸、ま、る、術、を、い、ふ、と、在、下、等、が、及、ぶ、も、い、ふ、此、は、中、大、と、鍊、砲、を、り、  
祿、と、食、む、聞、人、を、い、ふ、獵、戸、們、立、勝、り、能、ま、る、も、い、ふ、を、讓、と、正、告、推、禁、め、て、開、い、  
ナ多キト

ゆとる、那、虎、の、出、暴、れ、折、咄、鬼、平、五、と、共、侶、の、敵、制、め、く、欲、せ、や、も、実、是、人、力、の、  
と、及、ぶ、死、物、あ、ら、其、後、又、仰、を、稟、て、洛、内、洛、外、を、求、獵、り、所、在、の、知、れ、其、風、首、級、  
の、見、る、奇、瑰、あ、ら、今、白、川、山、在、り、と、久、も、風、聲、の、と、也、出、没、不、測、の、変、化、は、い、  
非、如、那、山、を、求、獵、る、も、深、く、隠、れ、て、影、を、存、せ、る、這、回、甲、斐、る、と、い、ひ、主、君、あ、ら、朝、に、  
畏、れ、あ、ら、も、那、虎、賀、茂、河、を、ち、渡、り、洛、中、入、る、死、鉄、と、愚、民、們、安、心、仕、は、い、  
ゆ、云、と、世、の、悪、評、も、い、次、臣、も、銃、の、精、兵、を、各、四、五、十、名、相、從、り、一、條、よ、三、條、を、  
那、方、の、河、原、と、も、成、ら、愚、民、們、安、堵、仕、む、倘、又、那、虎、山、を、出、て、河、を、渡、ま、り、も、あ、ら、暗、  
驍、を、定、め、諸、隊、と、合、て、敵、を、捉、る、便、宜、も、い、ふ、と、舒、る、意、見、も、景、紀、も、疎、心、枝、額、を、衝、て、  
現、正、生、の、真、示、を、い、恐、れ、る、愚、意、も、同、山、の、虎、の、巢、穴、を、況、那、山、の、如、意、嶽、比、獻、  
比、良、の、高、峰、陸、續、し、て、連、山、波、濤、の、勢、い、あ、り、廣、く、險、山、路、を、勞、り、て、功、を、ん、ら、  
河、原、在、て、他、を、ち、地、の、利、既、我、在、り、実、も、便、宜、を、い、亦、真、賢、経、緯、の、謠、を、

喜しく共侶河原の勤役を請い政元如意なるれども今亦正告なる言の趣もその  
 理を承けられ已むに其議を饒して介ら且若們が請ふ任して愚民等の安堵を  
 賜ふや不中とん因々海傍を敵齋中太鬼平五郎火兵各五十名と隸遣して河原勤  
 役の頭人と兵飯並火某の有司談して受合ふべく勉め命され正景景紀  
 眞賢も経緯も共侶の言兼あそ退りける徳而五七日と麻痺れども京師の災賊安堵  
 せむ虎の在る山を背あく河原を護る何事ぞ河太郎と水虎といふ虎も亦水栖む者  
 や思ふ鳥詩人と云京童の癖るれ亦復是もの悪評あり政元これを洩して安らぬところ  
 と思ふのころ那頭人等口口返さんささあそ更亦徳用と堅削を閑室招き那虎の  
 顛末を解して却り申和尙の力人みる知る今亦あか加る師弟の法力をせせ  
 とも必是大功あり那靈虎を對治して先度の恥辱を雪めむとつれて徳用沈吟して  
 其義の仰あそも望む所いふとあそ原肉身の獸るも我六十斤の鉄杖も槌ふその甲

斐あそふもいふ約莫修の變化の人かどて征せんより有驗の法力あそこる尚臣僧の調  
 伏の修法を任ぬいふ一七日ゆ小驗あそ二七日大驗見れ三十一日あそ那虎自  
 然と滅息しく上下安堵のあそいと做え何の御疑ひか死らる貌を説誇る其言も理  
 あり似て政元本性修法と好め然也々と點頭て則其議をうち任して館の内を乾  
 淨処に護麻壇を飾りて徳用堅削の祈禱の效あそ程一七日と麻痺れども開り  
 と思ふ験のあそ既二七日小速あそ那虎の嚙ひ已も洛中恩劇のあそる北白川の  
 山里の村長故老們亦復政元の邸に詣來て訴るや那虎は今猶山中横必時きけ  
 と六里入都て生活を喪て飢渴不及徳も對治遅礙あそ六里入人種いふあそ  
 と悲告く請ふと西之番不及程東山殿も室町殿も政元の出仕あそ毎那虎は  
 尋ねあひてるぞ對治遅滞せる撰擇不応なる勇士いふあそと謹め政元一句  
 も答ふ由る只赤面して退るの心連り小焦燥と推鎮めて思慮る不士文を養ふと

千日するも一日の役不立んとて介る種子嶋正告紀内景紀鞍馬真賢並敵齋經  
 緯及徳用堅削皆我が恩顧なるはる小名と厭命と惜と敢憂と分者る。他們  
 去る憑一からぬ今の世の人心咸相似る開か中不猶も擇一人也。那大江親兵衛ハ和漢獨  
 歩の勇少年弓馬力藝千萬人不捷れるものも。學問廣博智慧量量我を見て勇  
 一の恩も思本性なれ他を招けて同試く馮心遂不靈虎と對治して我與面と與  
 在大功ありむ今まで他と漏れハ然し由京師入ると思れんやとて胡意の謀及及らけ  
 我を嗚呼鈍る悔れ且羞且獨領く主張既定の先他が機と取んとて夙近目  
 吟吟て秘藏の名馬不花美多。鞍鐙皆具を措いて是を庭不牽入させ。然而親兵衛  
 ぞ召ける介程大江親兵衛は這日政元の使をゆて。主の今悠慌げ我を召るハ何事や  
 んと思ふのう。牧馬はせ。徐不衣裳を救兵使と俱不來は。政元は。身邊に  
 何を。什麼親共衛恙る。我頃者ハ公私の勤務暇多く。憶を疎濶不過。今日

偶の見参るれ和郎不命をさる東西アそあれ先他と見上か。と。庭不指さ。親兵衛急か  
 了。是則鞍置る。一箇の駿馬と兩個の青侍を牽る。その馬身材を高く  
 常馬不傳れると。四寸其鬃尾と四足は白と雪の如く。其餘は全身蒼かりけ。當下政  
 元又のや。必之親兵衛那馬ハ近日我封内阿波園美馬郡劍峰より。忽然と出。來れる  
 是是世の龍馬。我是を獲て。走帆と命け。鍾愛を實。是千里の能あり。今是を  
 汝不與。什麼意。稱んや。と。親兵衛遠く。席を避け。額を衝く。あ。辱は御賜  
 の馬妙相皆具して。欠る。処ハ。千里の駿足。疑ひ。且那毛色も奇妙。實。是蒼  
 海洋を走る白帆。似る。如右名。古。今。注。見。之。物。散。馬。帆。と。走。帆。と。和。漢  
 魏の曹真。駿馬を驚帆と名け。古。今。注。見。之。物。散。馬。帆。と。走。帆。と。和。漢  
 暗合。愈奇。然。今。在。下。取。さ。る。一。期。の。幸。ひ。有。く。添。造。化。小。を。と。喜。び  
 氣色。小見れ。政元。倒。不。訝。り。必。親。兵。衛。我。只。和。郎。を。愛。る。の。故。の。比。よ。り。發。番。と

る。名刀家の花蹄も衣裳或は金銀調度の類世稀多と與へし。毫も喜ぶを氣色  
る。其折毎に固辭れし。那馬をのこ愛悦びて受し。其る意を。と註れ。親兵衛然  
其脚疑ひ入理の。在下東藩。在りし時。我老侯の賜せ。青海波の名馬あり。開  
亦千里の駿足。善大の馬と相似。且青海波。走帆の妙。對暗合奇。わく妙  
名蹄。宜定の。在下。這回の上京。浪速の浦。水路。那青海波を。幸せ  
り。小思ひ。千里の名馬を。賜り。喜ひ。別美。今も。身の暇を。賜り。  
安房へ。還る折。這走帆。ち無り。千里の遠。一日。稻村の城。到ら。思へ  
辭ひ。受奉り。自餘の宝。買の。愚。他。支。政元。苦  
笑。今。悔。思。却。已。然。氣。面。色。天。晴。忠。信。信。を  
正の東西。要。亦。本。意。稱。珍。重。就。又。一。議。御。向。和。郎。博  
識。より。唐山。の。故事。思。合。那。金。剛。虎。の。圖。を。瞳。子。と。呼。做。す。の。末。歷

異聞。小疑。其画の券。主竹林。巽風。命。其画。虎の両眼。新。自子。と。點。せ。め。あ。ふ  
怪。一。件。の。虎。忽。然。と。脱。出。人。を。害。し。世。と。駭。今。も。白。川。山。と。栖。り。那。里。在。り。約。莫  
這一椿事の顛末。世の風聞。知れ。然。言。省。て。今。具。其。是。故。心。苦。し。め。  
或。獨。戸。或。勇。士。暮。々。と。那。虎。を。對。治。せ。り。欲。り。或。又。神。祇。陰。陽。兩。家。の。厭。勝  
修。法。名。僧。知。識。の。加。持。讀。經。各。其。功。德。を。て。禳。す。欲。す。の。數。目。を。い。ふ。せ。ん。人  
力。法。力。而。も。織。成。も。經。験。す。上。の。謹。責。世。の。惡。評。我。身。單。集。て。我。面。目。を。喪。へ。も  
せ。御。を。查。ね。か。然。れ。も。和。郎。妙。年。の。勇。士。と。學。問。廣。博。智。慧。深。富。菅。家。江。家。の。老  
儒。も。優。り。憑。考。覺。れ。回。て。慈。を。釋。す。欲。を。乍。麼。何。考。の。術。も。て。那。虎。妖。鎮。ん。と。同  
れて。親。兵。衛。阿。容。る。色。を。謹。て。答。る。下。聞。を。敷。せ。玉。と。弱。冠。菲。薄。の。在。下。時。々。仰。合  
さ。り。博。士。態。で。答。ま。る。鳥。辭。も。空。礼。中。は。思。ふ。と。意。不。忠。告。不。似。心  
べ。丹。も。愚。の。本。意。を。罪。言。る。其。憚。り。と。肝。胆。を。吐。け。柳。元。弘。建

武の擾乱より世に戦國の今に至りて臣する者ハ君ヲ弑し子する者ハ親ヲ害し夫婦相背説  
 弟能言とするも同其り其の故ハ天変地妖屢見れて上一人より下萬民ハ儆戒ヲ示せとも仁政  
 第一能言とするも同其り其の故ハ天変地妖屢見れて上一人より下萬民ハ儆戒ヲ示せとも仁政  
 以天下ハ蒞ぬ其鬼鬼を去る其鬼神を去る其神人を傷らざる其物千歳を廢止  
 靈靈の靈靈と云ハ變化自在遂ホ崇メ做さるると云ハ那金圖の画の虎妖の如ク是  
 明君上ホ在賢相是ト輔佐する道をも民蒞ぬ鬼亦鬼を去る  
 人を傷る患いする者ハ壁京唐山モ徳の所ある宋均ガ九江の太守なり時其郡  
 虎多り宋均則民下知リて其檻と穿を去ク防せり久其後虎ハ皆江を渡  
 在るを去る云故実然又劉昵ガ弘農の守なり時異政あり其地の暴虎  
 皆子と駝ぬ河を渡して去ぬといふ是も正史ハ載す所淳々言ふあり又孔

子家語孔子泰山を過ると婦人の哭をうらめて其故を問ハ對曰舅と夫と見子  
 是皆虎ハ啣れり介らるると他御去ざる否と云の地方ハ苛政をばり孔子  
 是をばり歎きく噫苛政ハ虎よりも猛りたると云故事ハ益政ハ即正之を身  
 毎正しければ今せざれば民威從ふ國を治め家と云天下の平るも又平るるも口ハ  
 是政の好すハ賢相を以テ這義を事と云明君ト輔佐を以テ白川山多暴虎  
 も患いと做ま不足さべと憚る所も諫る政元々嗟嘆と然るも其政の好すハ  
 御高不啖く者ありと云一かど冠を見て鏃と磨る飢ハ蒞て稻を植る亦何を異る  
 介介遷遠事と云賢近術中と云と向けて親兵衛又云機ハ是事ハ先  
 者一善も做まされ其機先天地ハ言二惡内ハ萌を去る其機動をも以テ云  
 然ハ徳の流約あると水の流れ火の登ると異なるも仁政の事ハ國を治る捷徑  
 也今日を以テ今日必行行遷遠ハあざされ賢相ハ只那虎對治の一義を以テ

急げぬ。開の故。政元を政元とて開入甚多便直。今  
愚意を論まれば。那虎故画の变化にも。既に靈ありて人を傷れば。必是形體あり。尚  
形状。陰鬼。非如人を傷るとも。陰谷物を焼く如く。骨と折り血を流す。神  
善也。既成形體あり。或は弓箭銃砲の及ぶと。獨戸等が。怖れて力盡す。後  
勇士とへも耳怯して。思ふ故。亦陰鬼の類也。只人の目みれば。実を  
形體あり。者る。墓目鳴弦の法術を。他を讓ひ鎮む。孰の方も。弓箭を。征する  
術の。鮮れて政元胸啓く。うち。喉を。點頭て。寔不念。辯論。明亮。數。疑  
一時。釋。願。和。郎。我。與。白。川。山。赴。那。虎。對。治。大。功。甲。生。也。  
賞。祿。儘。也。馮。心。可。叮。寧。詞。他。事。親。兵。衛。兼。使。便。宜。を。思。ひ。小  
竹。然。と。在。下。淹。留。稍。久。既。幾。層。の。賜。一。介。の。功。を。思。ひ。小  
那。虎。對。治。の。懇。命。は。本。來。の。面。目。幸。い。成。事。も。恩。賞。願。ひ。歸。東。の

暇を賜ふ。政元。和郎の情願然る。人の。虎。獵。成。り。我。這。邊  
いと釋。是。當。家。の。忠。臣。益。世。の。勇。士。今。我。封。内。の。國。郡。を。兼。與。俱。將。軍。家。の  
仕。東。還。る。と。真。實。立。林。親。兵。衛。徐。又。御。意。厚。く。不。あ。れ。と。  
匹。夫。も。志。を。大。專。ふ。都。下。の。武。勇。士。諸。山。の。名。僧。各。々。空。く。成。事。も。靈。虎。對  
治。の。命。小。從。い。ま。る。富。貴。利。達。の。為。る。這。功。を。歸。東。の。暇。を。賜。ふ。思。ひ。在。然  
る。饒。一。尚。留。す。欲。一。縦。首。と。捕。ら。る。其。義。御。免。を。蒙。る。下。在。下。單。拔  
也。虎。那。山。未。獵。も。不。幸。一。虎。小。遇。日。磨。て。餓。死。何。容。々。と。山。下。と  
那。里。へ。又。幸。い。一。虎。小。遇。も。我。力。及。び。命。を。其。首。喪。世。の。胡。慮。も。人  
の。危。一。大。事。と。知。り。願。ひ。身。の。悲。言。既。不。書。也。思。哀。也。憲  
查。れ。か。と。義。を。見。て。勇。士。の。意。轉。也。政。元。一。霎。時。沈。吟。と。肚。裏。思。ふ。  
現。這。後。生。の。神。々。必。是。那。虎。對。治。の。大。功。也。開。入。不。歸。東。の。願。ひ。を。饒。一

八代傳九郎

後醍醐天皇

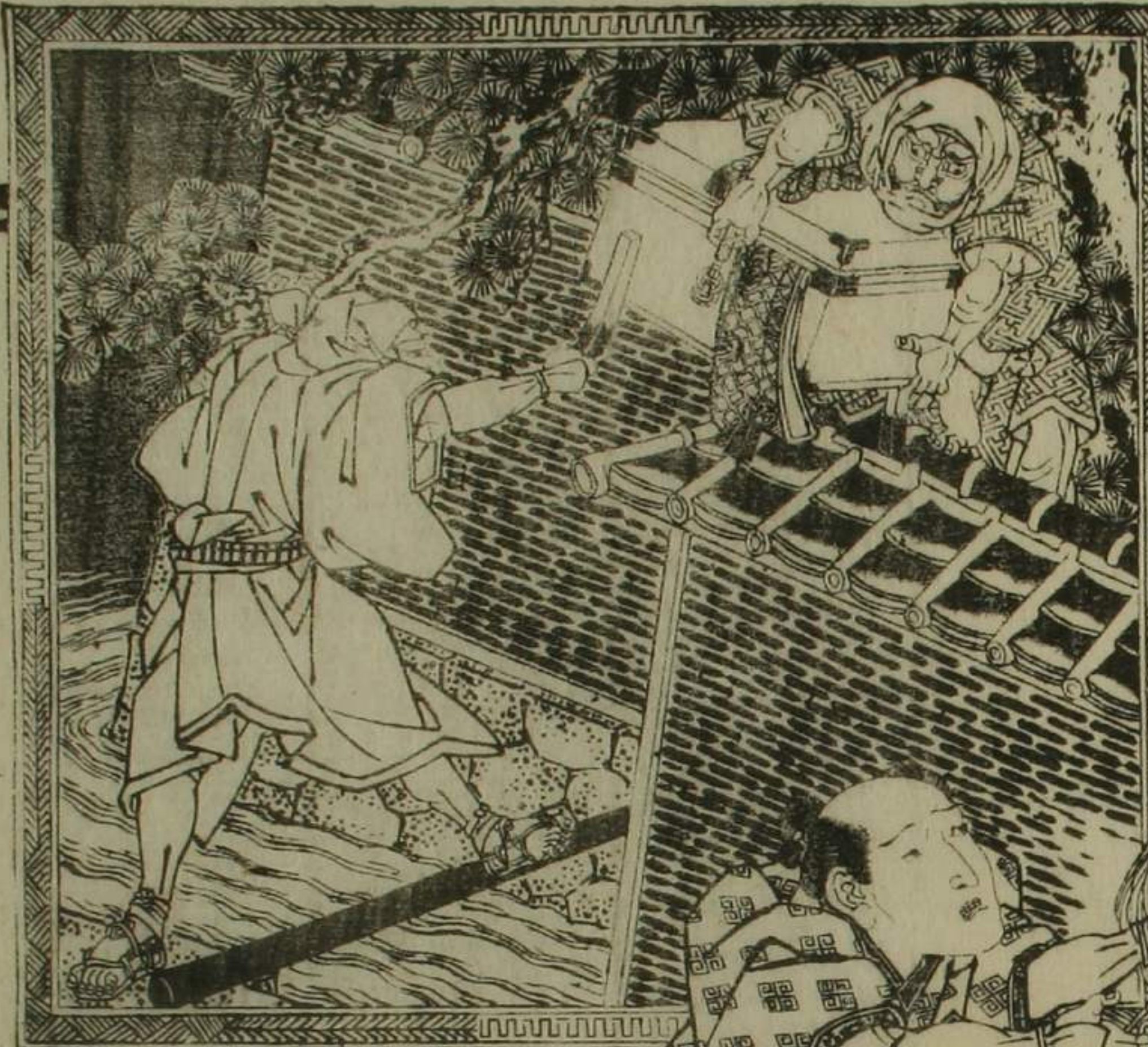


其れ他も亦我命令と空しく必虎を獵するべし我始より心を用ひて今日まで留めし這後生を  
 放ち還す惜げれども虎の一美我上中。龍辱安危の擧小在の任れ歸東の願ひ成  
 饒して成事あるや否やと見る小不如と處うやく小主張あつち點頭でや親兵衛  
 和郎の情願人各其王を不其忠誠を感するのあまり。那虎對治の大功ある我將軍  
 家の稟上て其身の暇を取去し。あ美々寧疑いで疾山獵の準備をそあまほしけれを感  
 親兵衛阿と志て膝の杖むと覺ぬまふ。怡悦不堪を額衝て賢相維上小在を。目今免  
 許の御一言。則是將軍家の台今同トかへ。疑ひなる小あなれも。猶一條の願ひ小在下  
 賢相の威福小あり。那虎を對治し畢。徑小近江路小赴て。辞せしと安房小還入豫  
 聞小幸崎坂本逢阪大津との四箇所又新開の。管領免許の關符る外藩の武士を  
 出さる。公の實事で。目今。關符を賜ら。期小臨て。進退不便小い。今疾賜  
 れか。と公も政元うち笑ひて。開小亦大く性急之和郎那虎を對治す也。

公實を乞ふ早々。と詰れ。親兵衛完介と咲て。御疑ひ小ふ。在下不似小  
 公も。詭言も。公實を受て。約小背。關符を越て。安房還る者。今日まで御疑ひ重て  
 逗留。公も。今關符を賜ら。安心中。打立。然も。饒を去。連り。公も。政  
 元。困。頭。傾け。介。是非。及。公實を會せ。後方。公も。  
 一個の近習。吩咐。文句。箇様々。公も。公實を寫し。跡。公も。花押を  
 印。卒。與。親兵衛。邊。膝。杖。受。戴。故。退。徐。見。公も。  
 其書。道。安房里見。義成。使臣。大江親兵衛。仁事。右因。台命。雖  
 令。淹。留。本。邸。然。今。般。以。命。對。治。白。川。山。虎。狄。之。義。故。進。退。儘。他。之。情  
 願。若。有。其。功。而。證。据。分。明。則。當。許。過。其。關。隘。而。歸。東。也。其。功。未。分。明  
 非。見。所。殺。虎。雖。云。欲。出。關。門。敢。勿。許。進。止。宜。從。此。旨。文。明。十。五。年。十  
 一。月。日。示。辛。崎。坂。本。逢。阪。大。津。四。所。關。守。等。左。京。北。

親兵衛這書を讀訖。卷て懐ふ夾札。政元の又の書。和郎那山赴く。弓前鏡砲不  
捷とする。伴當幾十名と從せし。と問ふ。答く。然し。人只け。倒れ。足も買縁りや。く。  
事小益る。在下。伴當の安房より相從ひ。者毎久く客店。小宿。あれども。只。この。と  
告知せ。近江路へ。半。置。下。係。從。者。一人。も。望。り。と。辭。を。政。元。感。嘆。し。壯  
勇哉。噫。勇。多。る。左。も。右。も。和。郎。の。隨。意。軍。進。退。せ。し。ま。へ。這。郎。中。我。外。騎。馬  
たる。者。を。饒。さ。る。も。兼。鞍。を。見。ま。く。欲。け。は。六。の。庭。上。より。那。走。帆。ふ。ち。乘。り。宿。所。不  
疾。山。獵。の。准。備。を。せ。今。宵。より。一。く。企。て。吉。左。右。を。そ。ま。げ。れ。と。い。そ。が。立。止。親  
兵衛。の。敢。亦。再。謀。及。び。お。少。少。御。免。を。蒙。り。仰。小。從。ひ。ま。ら。ん。と。答。て。馳。退。於。早。く。縁  
頼。小。立。出。れ。青。侍。等。が。あ。る。ゆ。く。馬。牽。と。ま。れ。親。兵。衛。の。前。輪。小。を。撰。り。閃。り。と。ち  
乘。る。廣。場。少。地。兼。徐。小。兩。三。番。兼。遠。一。兼。復。一。卒。と。な。り。小。青。侍。等。小。寮。内。を  
馮。心。騎。馬。の。礼。鞍。額。衝。に。坐。席。の。方。別。を。示。し。悠。然。と。外。面。投。り。出。け。り。係。而。大。江

親兵衛の名馬走帆。うち乗て宿所。近く。たの。末。身。程。小。又。那。直。塚。紀。三。六。を。の。日。由。大。部  
屋。小。部。屋。の。毎。餅。を。賣。ふ。末。お。け。れ。憶。ぎ。も。今。這。里。中。親。兵。衛。の。必。遭。く。路。の。備。小。跪  
居。る。と。親。兵。衛。う。ち。見。く。馬。を。駐。め。り。登。下。を。开。里。る。漢。子。汝。の。折。々。我。宿。所。へ。來。て。館。餅。を  
賣。る。經。紀。兄。叔。と。問。六。紀。三。六。然。し。の。比。脚。誂。の。米。饅。頭。を。ま。あ。り。せ。り。小。可。あ。て。い。の。小。お  
親。兵。衛。點。頭。く。ま。く。六。汝。と。勞。ま。り。と。あ。り。せ。ね。く。と。い。ひ。も。腰。小。挿。る。扇。子。と。共。小。墨  
斗。と。早。く。抜。出。て。件。の。扇。子。の。面。背。小。數。の。所。要。と。寫。着。て。乾。き。筆。を。推。置。て。墨。斗。と  
收。め。り。登。上。餅。師。我。安。房。より。來。り。伴。當。們。の。三。條。某。の。町。の。客。店。某。甲。屋。小。在。り。そ。の  
中。小。雪。代。四。郎。と。喚。做。る。一。個。の。伴。若。黨。有。り。汝。歸。路。小。立。寄。り。そ。の。代。四。郎。小。這。扇。子。を。正  
可。小。遞。與。わ。馮。心。む。と。い。ひ。六。紀。三。六。を。ま。り。邊。く。身。を。起。し。て。馬。の。邊。小。近。着。て。件。の。扇。子。を  
受。令。て。恭。く。答。る。中。仰。兼。り。い。ひ。ぬ。今。日。の。毎。より。いと。早。く。賣。買。果。小。の。程。今。く。届。け。ま。あ。り  
せ。ん。と。い。ひ。て。そ。の。れ。と。送。の。応。答。外。と。あ。り。人。の。耳。目。を。憚。り。の。圖。り。と。る。小。紀。三。六。後。門。を。投。て。與



あつ小出像の本文第八第  
百四十五回の小つまひく小ええり

八代傳七郎卷下

+

文楽堂表



第六



紀六小逢ふ  
仁  
郎中の騎馬

あつ小出

あつ小出

あつ小出

八代傳七郎卷下

文楽堂表



必否と云ふべく既に相譚果一為汝の那里を辯去。鳥夜不紛れて甲夜間より亦  
 本郎近着て後門の西の故赤松兩樹ある。築牆の外不穿我那小姐。擡擡以て  
 出く來ぬと云ねがし。有徳と云ふ豫より思ひけり。ふあねども臨時の所要もあはれ  
 親の管軍用金を百兩竊して。懐へ久く温め措き去向の路費の医一くは只欲か  
 る。鐵の鹿杖も最重ければ。汝命も不便る。白川山に暴虎あり。且親兵衛  
 奴と狙撃多し。小鳥銃を要緊され銃砲二挺とあると言送もる。其後示せ。堅削満面  
 うち笑れて現脱落る軍師の采配都く隨意せざる。先急病の趣を告ぐ相計ひぬ  
 ひねと云ふ徳用再議及び。又遠侍立出。青侍等をり。悠々と有司告て。堅削と扶  
 出。轎子に乗せ。宿所遣り。話分面頭。お又室町將軍。尚の外様の家臣澄月香  
 車介直道の。星小管領政元の招に不心。大江親兵衛と聞槍の折後。を攬り  
 の。刺鬼平五景紀。怨の投石。撲額を傷られ。落馬をり。折の為。体を隠

まことこれと人不知らむ。世の胡慮あり。將軍家の脚覚宜く。も朋輩の誹謗  
 面伏され。身の撲傷愈えども。猶病着。假托。久く仕せ。あり。又一層の悪風  
 聲あり。星小直道が管領。元招。聞槍の場。造る折。其を將軍家。不懇稟して  
 御免許を稟。な。況安房の男臣。脆く。負。更。助立の者。側杖。打れ。を  
 恥と思。阿容。る。俛。自殺。せ。幾。居。是。他。恥。幕府の御  
 瑕瑾。の上。ある。故。杖。祿。二百貫。を。放。され。身。の。暇。を。賜。死。然。る。衆。口  
 喋々。あり。直道。これ。を。知。り。且。驚。且。怨。堪。げ。深。念。小。枕。を。摧。は。つ。後。う。を  
 一箇の計策を。示。ければ。年来。股。肱。腹。心。と。憑。思。六。七。個。の。弟子。を。悄。や。招。を。を  
 件。の。風。設。耳。を。耳。示。各。も。是。昔。の。言。少。知。り。て。あ。ら。ん。む。我。身。危。不。即。思。不。那。大  
 江。親。兵。衛。の。武。藝。標。姚。我。黨。の上。不。然。他。不。負。る。獨。我。の。ま。あ。ふ。れば。執。念。深  
 怨。む。く。あ。む。只。憎。む。死。の。景。紀。を。他。が。救。不。我。を。幫助。ると。同。士。殺。を。あ。は。は。て。七

我の疾を負ひ落馬もあれ倦れ送恨の景紀不在り然るを那奴の陳謝及至五虎の  
 員中あふる不正告真賢經緯等と共侶小暴虎を防禦の與夥兵數十名の頭  
 人として賀茂河原の勤役の辨侮をせしむるべし誰れ其器小勝らむとのんや又真賢  
 正告經緯も介せり。年来咱等と言合し武井執の友と爲義小背たり。我屏屋を  
 訪ひもあも二ひ時を治貌る那勤役して快らね然らば這奴們も恥を赫奕して這樹影  
 腸を毆平えと思慮らう方寸ふゆる一箇の算計あり其計策の箇様々々と具に示して  
 又いさう和殿も師弟の義小仗り俱小憂い分えと思り那里小赴はく流言一々事の  
 當否を見よ我計策はれ其折和殿等と共侶小河原の守屋小赴はく。吾も謀りて  
 怨を復さんとの茂什麻と奴心氣煽る密談小七個の弟子の送小面を注するの心難  
 たる井中順風耳九郎千里眼八と喚做る。惴雄の壯伎あり卒然として俱小答る  
 中御送恨の事の趣然とそと查しなれ俱小慨をいられ我们不似小いとも信時小

考く己が頭の蜂吹くのと御教諭に従うんや真趣神出鬼没の良策あり必  
 あり初まえ期小臨まわ我門七名助劍勿論た死んぬの免れら安れと詞雄を多  
 尉況自餘五個の弟子も威遠俠氣小励され俱小神水と喚り誓ふ做して赤心小示す  
 中直道斜るを懸ひく然ハ事と急ぐべと要金十兩を命出して耳九郎等小遊與  
 去けり介程順風耳九郎千里眼八の七名北白河より這方多処々の民屋赴は流  
 言と考り一は這言草々賀茂河原正告景紀真賢經緯等の守屋小赴は登時  
 去の四箇所一列の夥兵毎件の風聲をうち所々駭怖る大々々々情地を聚合て  
 皆共侶小談を多。昨今這頭の風聲中知りぬ往北白川多一莊客の夢小那靈虎  
 忽然と其枕上小告る中我某の且噓昏小賀茂河をら渡して權且京遊多  
 欲ま去るは我河を渡さむと那河原を相成る宛内鬼平吾景紀種子嶋中太正  
 告轉馬海傳真賢を敵齋經緯等六年来管領政元の恩顧を負て武藝小誇り

まづ。使ふ不良の極多き。矧又其隊不従。殺兵們も。錢を欲り。酒を會ふ。母不  
管領の權威を借る。市人の患ひを做す。一個も好人あるとす。その故に我那河を渡  
す。日頭人殺兵漏れ者あり。度々せむ。欲き汝達日本の曠昏。那里に於て見よか。と  
公孫と思へ。驚き覺けり。あのみ只一人のこゝろを。一村も愚直なる二人も三人も。あ  
夜の夢。夢の告あり。とら。その奇談を今朝初。早。虎のト日の。則。今。下。磨。の  
ま。可。ら。わ。と。公。開。が。中。種。子。嶋。正。告。の。隊。兵。ま。り。之。田。利。吾。師。平。と。喚。做。を。小。頭。人。あ。り。  
一。重。時。沈。吟。して。衆。兵。小。聲。め。く。り。あ。り。い。ふ。せ。ん。と。今。日。小。通。れ。る。火。害。を。避。び。て。長。詮  
議。時。を。殺。さ。誰。も。免。る。者。あ。ら。ん。や。然。ば。と。ま。り。と。去。る。勤。役。を。為。す。罪。是  
亦。免。れ。ら。し。所。詮。觀。音。寺。の。城。に。赴。け。六。角。家。の。降。參。見。是。より。外。不。徹。る。と。  
公。大。家。有。理。と。悟。り。俱。不。逃。支。度。を。做。し。程。比。叡。山。下。風。時。有。て。颯。と。音。一。束。勢  
ひ。河。原。の。沙。石。を。吹。颺。く。黒。白。も。別。れ。り。一。殺。兵。們。の。驚。慌。と。虎。嘯。け。風。起

る。古語は是なり。那景虎の出来ぬ。逃はせ。と。情喚は。聞は紛れて。皆共侶。近江  
路を投て走り。十五六町。及が程。勁風早く。定り。只西山。没んと。登時。鞍馬。真賢の  
隊。不謀。れる。野兵の小頭人。藻洲。千重。不と。喚做。を。兵。あり。猛。不。衆。兵。を。喚。住。め。大。家  
我。憶。不。我。們。僥。倖。立。て。觀。音。寺。の。城。に。赴。く。も。壁。首。鹿。蛇。に。似。て  
一。隊。の。長。き。勇。士。あ。り。戦。飯。費。と。せ。せ。れ。受。容。れ。れ。争。何。せ。然。後。客。に。敵。地。に  
い。ま。ん。よ。ろ。の。日。屬。我。們。を。慘。刻。く。罵。り。使。ひ。る。四。個。の。頭。人。を。誣。り。身。を。安。く。せ。然。先  
兩。三。名。早。く。京。へ。走。り。か。へ。館。不。訴。稟。さ。す。小。可。等。が。頭。人。種。子。嶋。中。太。紀。内。鬼。平  
五。鞍。馬。海。傳。を。敵。齋。齋。經。緯。の。河。原。の。勤。役。功。を。故。罪。せ。れ。然。と。陪。と。怕。れて。及。俱。不  
逆。心。あり。情。地。に。六角。高。頼。に。謀。し。合。ち。那。大。軍。を。引。れ。魁。して。京。師。を。攻。ん。と。早。討  
隊。の。脚。勢。を。り。捕。捕。せ。る。大。事。の。既。ひ。い。ん。と。是。一。や。る。告。ま。る。必。討。隊。と。向。ら。ん。  
その折。我。們。先。找。し。不。意。不。起。り。鎗。砲。も。我。頭。人。も。一。個。漏。れ。さ。敵。果。一。を。我

大家都是二百名推並忠告の賞禄賜るの事河原の防禦に罷られて長那  
 虎の患を免れん夙々の説に従ふると詞急迫く説諭其大家所々悦び堪へ開ら  
 亦奇妙の計ひるる素より我々が頭人るる海浪戸るる敵齋齋海傳の隊を隷  
 られて日屬威勢を振るると朽惜く思ひ開の物怪の幸ひる。今甲申乙酉ねも  
 人を擇く口状を誨く京へ遣ま程の既ゆく日の暮れ討自使を迎んとて大家其里  
 より引返す。故の河原近つたけり不題澄月昏車介直道の言表腹心の弟子七名  
 流言の秘策を相授け。指き方遣去次の日思ふよりむまむ。猛可夫妻を離別  
 今茲之歳あるける獨女見さへその子の母を隷け遠離く既自身の覚期も。那  
 弟子は音耗をいふくと程約莫五七日を經て耳九郎眼八七個の弟子の情地白  
 川の方より来る。直道に報る事。御妙策の流言既不れ。賀茂河原の勤役の士  
 卒們も送る是を咄知りけ日毎河邊立盡し。四隊の兵毎の今日皆鬱悒に面色

中。小聚りと相長くも。憶ふ久しとて。他們の逐電もあるも。早く準備を整て  
 出させんと。薦めり。直道は。再説不及。奴婢云云と。諷く。留守を委ね。然而准  
 備の鱗鱗を。羊少る。兩個の弟子。携へて。その。暎昏宿所を出て。俱賀茂河原赴  
 けり。介程。種子嶋中。太正告。紀内鬼平。五景。紀鞍馬。海傳。真賢。無敵。齋齋。經緯。累  
 虎防禦の與。河原の勤役を請ひ。各口の隊兵を。日毎河原出立。倣に  
 事もある日。過を程。有一時。勁風。沙石を颺て。天と烏。く。姑且。て。風定。天霽。て。後  
 見れ。都て。河原。平。一。人。も。在。ず。と。訝。る。と。遠。も。と。各。況  
 可の弟子。西二名。の。役。従。て。あり。け。不。吟。响。て。疾。那。奴。們。を。趕。蒐。て。是。非。を。其。後。を。と。て  
 左右へ部して。走。せ。し。日。の。暮。れ。を。か。ら。ず。れ。心。の。く。聊。く。紀。真。賢。經。緯。も。俱。正  
 止の守屋。取。合。て。之。を。什。麼。と。商。量。を。登。時。正。告。ら。ず。御。向。德。用。が。堅。削。と。我。們。の  
 謀。合。を。機。密。さ。へ。り。の。折。互。に。殿。兵。も。虎。の。嗚。耳。怕。して。感。逃。る。事。も。あ。ら。ず。む。と。い。へ。



經緯眉之類。尊て然るも其事。竟爾敷る。談は姑且。閣て風聲の如く。那虎は這頭へ出て来る。
 我們的。事何れせん。と。真賢。ち笑ひて。い。さ。分る。あ。ん。我。と。和。殿。の。臨。時。の。役。也。御。内。人。
 あ。さ。れ。ば。那。奴。們。都。て。悔。り。て。事。を。や。り。て。懲。え。る。も。權。且。影。を。隠。え。し。ま。え。と。景。紀。點。頭。
 有。理。の。如。く。我。も。尚。是。近。習。也。兵。頭。さ。ら。ば。那。奴。們。飽。を。思。ひ。け。ん。左。に。さ。れ。ば。
 あ。れ。明。る。館。へ。廻。り。て。乞。と。其。罪。を。正。さ。べ。と。詞。の。ま。に。記。ら。ば。外。面。不。喝。り。者。あ。り。誰。也。
 と。問。へ。別。人。を。澄。月。香。車。介。直。道。が。兩。個。の。伴。當。不。樽。餘。を。齎。り。て。這。四。個。の。頭。人。勤。
 役。の。安。否。と。訪。ん。と。情。地。不。出。く。來。ぬ。之。當。下。景。紀。經。緯。の。連。一。く。立。迎。く。馳。て。圍。坐。
 請。入。る。れ。直。道。則。這。四。個。の。頭。人。對。面。し。て。諸。君。の。地。の。盛。勤。の。事。は。趣。を。我。知。
 ざる。あ。ら。ね。ど。是。曩。那。那。聞。槍。の。失。せ。を。當。中。の。首。尾。耳。に。今。も。出。仕。を。禁。め。り。久。
 しく。屏。居。る。れ。疎。濶。胡。越。不。似。れ。ど。昨。今。世。上。の。風。聲。の。如。く。我。も。安。否。
 問。も。情。地。不。出。て。來。る。べ。と。い。へ。景。紀。先。答。て。吁。忝。に。御。深。切。御。出。投。石。の。失。を。宣。示。解。ん

と。思。ひ。不。御。筈。居。の。う。れ。只。得。黙。然。其。の。後。又。の。勤。役。也。暇。を。も。ひ。へ。と。倍。話。も。果。ぬ。正。告。
 真。賢。經。緯。も。共。侶。不。快。ひ。を。舒。さ。る。を。相。祝。し。却。今。宵。野。兵。們。が。不。慮。の。逐。電。傳。と。告。
 る。と。直。道。う。ち。听。く。開。安。く。ぬ。る。が。意。不。平。肖。の。小。卒。們。が。夢。物。語。耳。驚。馬。を。逃。さ。
 とも。那。里。い。る。や。天。も。明。べ。か。り。來。な。不。然。も。心。を。勞。い。な。し。然。と。あり。夫。知。り。て。咱。が。齎。
 へ。薄。酒。あり。推。搦。馬。も。も。る。と。公。間。の。直。道。の。兩。個。の。弟。子。あり。其。二。種。を。披。露。し。火。を。
 吹。込。酒。を。盪。め。り。餘。と。止。ふ。安。排。づ。酌。立。り。薦。れ。ば。正。告。景。紀。の。い。ゆ。ん。真。賢。も。經。緯。も。
 素。より。飯。は。優。り。る。齎。り。の。倍。折。息。を。掃。ふ。玉。帝。と。稱。々。俱。不。快。ひ。を。舒。て。送。酌。交。を。
 其。不。累。向。ひ。て。蛇。を。吞。む。と。飽。む。蜂。を。吞。む。萬。蟻。も。嫌。む。右。に。旋。り。左。に。回。り。主。客。
 酌。配。せ。る。も。さ。れ。ば。草。か。ら。小。謡。曲。を。息。絶。し。け。ん。吹。り。も。あ。り。扇。拍。子。早。歌。の。古。の。廻。り。
 正。告。の。御。不。德。用。堅。削。不。謀。一。合。さ。れ。り。も。忘。る。ま。ふ。ら。ち。與。下。る。醉。不。堪。の。柱。の。生。
 真。賢。の。肘。に。枕。し。寐。る。も。知。ら。ず。横。臥。す。唯。直。道。の。始。より。多。く。不。意。を。受。せ。り。猶。景。紀。の。薦。



八代傳九郎卷三

十七

○文英堂藏



香車大  
進歩  
兵に攪る

八代傳九郎卷三

○文英堂藏

めて已に當下景紀頭を掉し。澄月主を無理に大差を幾番とる。果して沈の如くふかり  
 ぬ。今又是を争何んぞ。縦命を命々とも。這不與否否否。と固辭む。直道冷矢ひて介  
 ら。和郎の望不儘を命を命々人投石の送恨受ても見上ると。板打振晃めを刀の電光  
 景紀の吐嗟とたり。刀を合れども合ざる隙を首と地と敷き落されて血焔立てを付と  
 け。経緯是を駭に慌て。やれ直道狼藉多と喚禁め。組と杖む。直道透を致  
 拂取も烈し。刃火不敷れて経緯も瘡を負。程不正告直賢驚覺てを何事ぞ。共  
 侶を合れる刀と板閃めて。徑直道を敷んとを程。もろ各を直道の西個の弟子推隔。丁  
 下礮と致結ぶ。正告と真賢の遂直道の弟子を甲乙共斫けし。又経緯を相助。澄  
 月を敷んと競ひける。既不と直道の三個の敵不敷立られ。數箇所の深瘡を負。程不  
 外面張か。直道の助劍五名。千里眼八順風耳九も準備の短鎗の刃頭と揃へて  
 齊一吐と稠入る。耳九郎の経緯を只一鎗刺殺を。の勢ひを氣をゆる。眼八以下の

助劍の正告と真方。息をも親れ。攻めける。然れども正告真方の覺ある。猛者ある。俱  
 俱痛傷を負。六個の敵と引受て。最も烈しく戦ふ。程不耳九郎眼八以下の助  
 劍。而三名の鎗の蛭巻斫断す。瘡を負。有。一程。柳。逐電ある。  
 野兵の小頭人。三田利吾。師平。藻。洲。千重介。既一味の野兵。両三名を京へ出口。許の  
 遣。去。後。正告以下の頭人。為。守屋。不在。在。事。の。光。景。と。張。觀。んと。火。計。の  
 野兵の心利。二十名許。徒。各。鎗。砲。丸。を。籠。罩。焦。火。を。准。備。多。情。や。ふ。か。へ。の  
 先。正。告。の。守。屋。の。前。後。も。内。の。景。迹。を。視。正。告。真。方。経。緯。の。各。鮮。血。を。塗。ま。す。の。  
 五六個の敵と斫戦。孰も暇あると。景紀の既敷。外。不。助。の。主。客。あ。る。吾  
 師平と千重介。這。開。戦。の。事。情。を。知。り。と。折。を。ゆる。と。合。兵。矢。一。味。の。野。兵。其。長  
 示して。俱。守。屋。不。杖。入。り。て。前。後。も。連。發。て。二十。挺。の。鎗。砲。丸。誰。も。一。個。も。免。れ。ん。身。方。  
 正。告。們。是。二。名。敵。の。直。道。以下。六。名。各。躬。所。を。敷。洞。され。象。棋。頭。不。介。けり。

第百四十五回

五頭を献りて衆奸卒數頭を喪ふ  
脚小を榎木と悪師徒を足と断る

却説藻洲千車作三田利吾師平二十個の親家を幫助して頭人並の澄月師弟と矢  
場の鍊砲の七劍を造化好の情動折の途の残り住りる親兵二百七十八名も安危心許る  
あそ情地のみり来れば千車作則他們の向て方僅四個の頭人と豫面喜る香車介  
師弟五七名と斷殺して勝負いまださうし折我們の来れば料も便宜とぬき  
潜ひ寄つ前後より二十挺の火炮をとり一度の結果けうと云事の趣を告て又の  
意ふ澄月香車介直道へ何等の故の其弟子六七名を伴ひ来て四個の頭人  
種子嶋紀内鞍馬無敵齋等と余る禍事を做出するや情由を知るよるければ  
這師弟さへ共侶の數捕け只妙なるなる今這主客の首五級を俱の鎗とまらりて  
既の惣稟志一如く正告景紀貞賢經緯が謀叛小與する澄月香車介直

道も一味の弟子六七名を従へて今宵情地の守屋の来て俱の觀音寺の城へ走ん  
と催促小可們の及びせ小可毎相謀りて急の起りて鍊砲をとり送る撃捕りひき  
と惣稟志の首尾相稱して御感入の増さるん有司の質一問れん折口を合せよ  
忘るるといふ大家歡ひ感上その議定は精妙之然らば先頭人等の首極落し  
とあべと情動もが火家の社役五七名内に入る程の衛の這親兵們を趕菴て  
河原を左右走りよる四個の頭人の弟子十名許竟の尋遇りければ途の甲乙  
一猪のりて守屋へかへり来れば外面の親兵們的居立立在るを遙の見て腹  
立一歩の同音高く若們衛那那里へある我門既の趕索ね志を知らぬや烏  
の白徒奴がと相罵りつ近着程の千里作吾師平毫も噪を早く火家の  
兵毎の長き示せば皆とる引提鍊砲を直して角頭揃る二十挺一度の  
槓と鑽て發せ又頭人の弟子們も防ぐ暇あらず果敢る都て撃つ小され

血及吐を衝も櫛ざらも。あるト首小息絶けり。千重作笑つ是と見て又衆兵の  
中。既の送る。櫛果して外は機密と知る者なれば各後易く。討隊の士卒の  
出来ぬ先。咱等五個の頭人の首級を推へ館へ参りて。倭も短る功を奏せん。一  
百名の三田利と共に去の処に住るべく。餘の咱等と俱にゆきねとのを吾師平推禁  
めて否とよ。要る守屋小在りて。倘那虎の来ぬ小逢の免る者有るか。然今  
日の計較へ皆平等の様なる小介まで優りあるもあらず。皆共侶あはれぬ。お  
大家然ありと。心て千重作が諷に従へね。十重作只得那意小儘して。隨即正告  
景紀真賢。經緯直道の首級を捕り。相推して吾師平と共に。二個の火家と  
お。西陣の館へ起り。程小衛向。這河原の守屋の小頭人藻洲千重作。三田利  
吾師平。火家の小卒。三名と。四個の頭人正告景紀。真賢。經緯の叛逆を  
火事。訟ある小。主君政元の下知に従ひて。正告們を緝捕の一隊。野見鳥真

名五郎校條と。喚做を兵頭士卒五百名を領て馬と名を來りける。小憶を途して  
仍會ふ。則千重作吾師平。事倭々と伴告て。四個の頭人直道等の首級を  
實檢し入。久。真名五郎歡び感と。有。倭三田利吾師平。其隊の兵毎と相俱  
早く西陣へ参り告ありて。櫛捕う。去の逆徒五名の首級を御覽小款へ。又藻洲  
千重作們。二三十名。這里より。我小従て。案内の爲。小河原へ還り。逆徒伏誅。我  
等。觀音寺の敵心許る。我へ河原へ赴。猶も非常と敬言。ん。去の意を。ゆ。と。宣  
示。其。大家異議。る。言。兼。し。吾師平。其隊の。夥兵。百六七十名。と共に。伴の。首  
級を。携。て。別。して。西陣の。邸へ。起。り。程。小。千重作。又。其隊の。夥兵。三十餘名。を。伴。ひ。て。真名  
五郎。を。従。ひ。ける。倭。而。野見鳥。真名五郎。校條。へ。参。り。兵。士。卒。を。従。へ。て。い。よ。く。路。次。を。い。は。れ  
り。既。し。賀。茂。河原。多。種子。嶋。中。太。正。告。の。守。屋。小。來。て。先。逆。徒。十二。名。の。屍。骸。を  
引起。さ。せて。檢。査。す。ふ。ま。ら。皆。銃。傷。の。も。ろ。び。各。相。戦。ふ。う。り。けん。と。お。不。死。刀。瘡

那身小ヨクあり。是尚最訝しむ。這敷れうける。直道が助劍の者の内中  
一個の壮佼いも死絶せよの時僅の息出して真名五郎隨即士六下知して叮  
寧の勅らして準備の茶を薦めり。又外面の敷れする。正告真賢經緯景紀  
等の武藝投石の弟子毎の亡骸を檢する。おれど皆銃傷あり。一人股を敷れ  
のそめて窮所なる。折れ我の復りて。事の仔細を許る便りをさう。登時真名  
五郎の這傷瘡見守屋の扶入れさせ。先魁生りける。壮佼と俱の勅り慰め  
徐の其實情を撈尋る。守屋の在りける。香車介直道が鎗法の弟子。品塚赤  
四郎と喚做者。則此が招了。直道へ景紀の投石の送恨ある。遂に流言の  
算計を行ひ。既の便宜を。今宵腹心の弟子。順風耳九郎。千里眼八並  
赤四郎等。をねて。這里の來て。謀りて。景紀を敷果し。且經緯の瘡を負し。又正  
告真賢等と大煞突戦。遠矣折誰と知らば。前後より。連敷て。鏢砲の

敵も身方も皆敷れて。共侶の倒れけん。その後の事と知らば。又外面の在り  
傷瘡見へ。種子嶋正告。鏢砲の弟子。河原の勤役の従事。花下仇太郎  
是の。這壮佼の口状。殿兵の虎の出来。風聲は耳怕。奮の風聲の  
起し時。皆悉逐電。又仇太郎。師命より。左右の別。他們を起し  
竟の及。日暮て。折返て。殿兵の在り。闇の紛れ。幾十枚  
鏢砲を連發。仇太郎。送る。敷れ。事の顛末。並に正告。景紀。真賢  
經緯。等。の。知れ。真名五郎。嗟嘆。原來。千重。作吾師。平。好。卒。們。の。議。を。早。く。聞。知。り。驚  
駭。其。胆。怯。て。逃。る。罪。を。瞞。ん。爲。頭。人。を。誣。て。謀。叛。と。訴。て。更。亦。便。宜。不。儘。て。  
送。る。是。を。敷。殺。して。伴。り。其。身。の。忠。義。を。罪。叛。逆。の。異。る。一。個。も。漏。さ。ず。捕。捕  
了。ね。と。隊。の。兵。毎。下。知。る。程。千。重。作。吾。師。平。好。卒。們。の。議。を。早。く。聞。知。り。驚  
駭。て。共。侶。の。逃。亡。と。表。す。野。見。鳥。の。士。卒。二。三。百。名。遮。り。禁。り。推。捕。籠。て。歐。倒。者。數。珠

撃ふ。漏す者多し。幸ひと来り。登時真名五郎被條へ捕捕せし奸卒等痛む。中産て伎倆の本末を責問ふ。千重作はる頼陳して。一霎時に事ひうけむ。自餘の殿兵々痛楚の堪む。吾師平千重作等の伴誑の計に従ふ。悪事を造り。招き。言赤四郎と仇太郎が口状を咄合せて疑ふ。約莫這奸卒二十餘名。御向鑊砲せり。四個の頭人と澄月師弟及正告等の弟子を。兵毎を。罪特を輕かむ。真名五郎又士卒の下知り。通宵是を衛らむ。左右まる程の天明。真名五郎。則士卒一百名を分ち。四箇所の守居を留置し。傷瘡見並罪人們を相牽せて。西陣多。郎は還り来ぬると。吾師平等。二百六七十名の奸卒を。捕て千重作等。千餘名の罪人と俱に。牢獄に繋せし。其後件の事の顛末を主君政元が聞え上。政元うち驚き。嗟嘆不堪む。次の日將軍家議の上。澄月直道の宿所。実檢使を遣し。ける。比妻の幼穉き女兒を。

離別あり。と聞え。兩三個の奴婢の。則家伏と籍を。小直道の。是紀内景紀の怨を復さす。欲する事の趣。亦く品塚赤四郎が。政元の家臣種子嶋正告。紀内景紀へ河原の勤役を。兩七判各々の隊の。兵の謀られて。狗死を。不覺の罪。亦是宅眷を。所親の。召放ち。眷屬。浴中の住ひを。就中藻洲千重作。三田利吾師平。二百名の殿兵。毎の罪特。重ければ。則千重作吾師平と。那鑊砲せり。四個の頭人。師弟と。殺し。殿兵三十餘名。咸斬棄て。首を。這餘百六七十個。同惡の殿兵。遠き嶋嶼に。流されけり。有。程の直道の弟子。品塚赤四郎。大赦の折。遇て。死罪を。免れ。又花下仇太郎。俱に。其深癩愈。死。

脚見ありけは心もあらぬ出家入道して一個北嵯峨多觀音の堂守の作りて世を  
 終り一個百毎の路傍に出で佛經を寫しり才の一行一錢の施を以て其半生を送りしを  
 然るの比五山の僧の狂句の大蟲已趨何留大抵猛獸在山可笑衆兵護水  
 又苛政可惶非民豈泰虎不害人人反相害又政命千慮勞無功澄月一  
 謀殲五虎とをいける下の一句ハ三國志演義の題目の姜維一計殺三賢と  
 秀句るべし抑この時の當て京師にて武藝を以て五虎の稱を以て秋篠廣當  
 りて第一と云ふ廣當は素是温順の君子にて已に勝るを仇と憎む那小人們の  
 同らるれば機変破滅の田地不入らば造化易る小紀内鬼平五景紀と云ふ時  
 人の舊小因て猶是と云ふ五虎といひり益廣當が賢小五虎の稱の數をたれハ尾  
 礫の中なる片玉の如と心ある者ハひけりある皆後の話るれも五虎の局を結ぶ爲め  
 備せざることをいふ是より下看官又大江親兵衛が虎獵の與小く白川山赴くと云

當日の段不復して見るべし間話休題介程小惡僧徳用ハ既堅削の機密を授けて  
 他を出遣し當晚便宜と現ふ小稍多の半より時候館の中事ある夜勤の近  
 習青侍の睡らざる者多し後堂へと静悄中雪吹姫の臥房ハ兩個の女房宿直  
 ち在り徳用とれと現ひ次の間より悄中誰う其里小ゆりありと喚立を兩個の  
 女房うち聞くと聲音ハ所知り徳用とれ疑ふ一個の女房と云ふ邊り身起して  
 次の間出で來ぬを徳用ハ小箇き方ハ身を潛まり遣り過り兩を掛る背より這女房の  
 頂と扱て呪と緊しく絞る聲も仰及てそ依息ハ絶ゆけり既小七徳用ハ其七骸を  
 徐小臥させ又只一個の女房と喚立ると始の如く此も亦絞り殺し外ハ宵勤の人  
 るければ會笑るが雪吹姫の臥る身邊より入れ雪吹姫驚覺て聲を立んと云  
 ると徳用透さば起して早く準備の布囊を銜せ結紐で眩暈小抱次  
 間不出で見ると鶴の姫の病惱平愈の祈禱ハ用ひる般若櫃尚積累れあり



是究竟と其一箇の雪吹姫をうち入れて。蓋して又四下と見廻さふ人々召ぶ鈴の  
 太緒の長く餘るを裁切つて柱に掛てあり。隨即是を斫合りて。櫃と膝けて背に  
 駝せし。案内知る縁頼の兩戸を外へ庭へ出て堅削の約束する。築牆の邊へ赴きて  
 他へ既へ外面へ来りし等。あらんむらむと思へ。暗に小石を拾ひて。投ぎ又堅削の  
 小石の内へ投返し。あつたを知らせけり。登時徳用へ駝する般若櫃とうち下して長く  
 餘る辯の太緒を松に投掛く。梢近く曳登る。身も亦松に攀登りて。徐に櫃を  
 繰下す。堅削の来りし。那鐵の鹿杖を構ひ渡りし。近づて来て。件の櫃を受合ふ。好  
 舊處へ退く程。徳用へ掛する太緒の携りて。早く外面へ下り來り構へ渡りて。造化好  
 とのひまを口をみかき。そこ摘夾て堅削が重たを殺し。既へ鐵の鹿杖をとり來り。只  
 感するもの。則これを初代。件の櫃を荷折堅削へ。鍊砲と行囊を膝附て。両肩に入れて  
 先後の立り。早くと申程。二十日あまるの月。出て路明ければ。追隊を怕れ。面を草で  
 隠して。

走ると飛が似く。早く賀茂河の大橋とうち渡り。吉田の茂林の邊を過る程。西の法  
 師の道傷の柳蔭あつた。一霎時あつて。憩んとす。櫃をうち卸し。清水を喫み  
 喘を定め。送る今宵の首尾を告る。徳用へ。雪吹姫を這般若櫃に捉合。竊り出さ  
 ず。擇ねを云と説誇れば。堅削の來りし。嗚呼。河原の守屋へ。酒を酌し。赴きて。那四個の頭  
 人。今宵大江奴を撃捕する。師父の密議を傳へ。皆飲みて。異議あらず。就中種子嶋へ  
 試戦の折親兵衛を撃。果さす。思ひ。杖條廣當。同意せ。君侯も我議を否と  
 敢許をぬ。言ひ。朽惜りし。和尚の計較妙なる哉。我々四名。殿兵。二百。加  
 加。和尚師弟の勇力あり。今宵白川山。不曉。とも。虎害。小遇。大江奴を撃。果  
 さん。疑ひ。徳而。那奴を結果。屍骸。隠さ。人推。並。那奴。虎。咬。れ。を。思。へ  
 ざる者。を。候。下。と。その。期。と。揃。る。勇。言。言。鞍。馬。紀。内。無。敵。齋。皆。共。侶。小。合。笑。て。介。今  
 宵。更。更。更。更。必。犬。江。を。撃。捕。て。ん。和。僧。の。美。を。師。父。の。傳。へ。那。山。路。の。來。て。候。を。固。

約束せしむ。と告る小徳用點頭。然れど走一守屋の如く。那人々へ立出。伏せ  
来よとの堅削ある。必て走り河原へ赴きて。姑且てかへり来り。然而徳用は告るや。  
咱等那里へ赴きて。守屋の光景を現ひ。小那頭人等へ。殿兵を招て。既山路へ入り。伏  
人影は絶て寂寥す。といひ。十重作吾師平。頭人の首級を齎して。伏家の兵毎共  
召し西陣へ。走り起る。其折間のるれども。堅削も徳用も。其異変を知らぬ。  
毫も是と疑ひ。原来件の人等。立出て我を驚かす。疾起。跟んと。せ。堅削然る。  
と心づ。是より。七銃砲の火索を。陰る山路の。小倉下。引提て。却徳用。西肩を。さ  
拾る。般若櫃を。昇は。走る。去向の。吉凶。知る。知らず。白川の。山路。遙の。登る。程。約。莫  
十町許。ふ。見れ。路の。傍。敗る。一座の。小堂あり。當下。徳用。聲を。被る。堅削  
等。ね。愁。重荷。と。載。嶮。岨。を。登。脚。疲。勞。れて。要。緊。の。折。ひ。く。ふ。一  
十二分の。掙。を。よく。せん。や。といひ。堅削。歩。を。仕。や。寔。然。之。這。櫃。を。す。の。出。内。の

秘措。那人々と。共。侶。の。怨。を。復。して。其。後。の。り。て。ゆ。く。も。遅。延。の。あ。ら。じ。く。この。ひ。は。の。  
俱。不。這。小。堂。の。板。縁。の。件。の。櫃。と。早。居。て。仰。伏。て。楯。を。遍。額。と。う。ち。瞻。れ。青。面。堂。の。三。大  
字。蟾。子。の。細。小。包。れ。ま。も。破。庇。と。漏。る。月。の。光。小。紛。ふ。く。も。あ。ら。ざ。れ。堅。削。呵。々。と。う。ち。笑  
ひ。て。原。来。の。本。尊。の。青。面。金。剛。庚。申。殿。狀。庚。申。る。ふ。賊。物。を。預。る。も。怪。し。う。い。あ。ら。し。金  
毘。羅。を。好。々。と。い。ひ。徳。用。推。禁。め。夜。へ。今。及。三。の。や。あ。ら。ん。此。物。欲。く。う。ち。保。其  
頭。の。准。備。を。せ。う。欵。と。問。へ。堅。削。有。有。咱。等。も。勿。論。同。腹。中。先。実。を。入。れ。て。後。の。ア。そ。  
い。ひ。櫃。の。附。る。行。囊。と。解。下。ま。う。ち。開。き。て。両。箇。の。割。籠。を。合。出。其。徳。用。左。右。を。く。る。小  
合。も。ら。ま。我。の。も。あ。れ。病。後。の。小。姐。が。路。ま。ら。櫃。の。も。ち。な。れ。て。患。苦。小。堪。む。あ。ら。ん。ご。ん。權。且  
こ。こ。こ。の。割。籠。と。差。ち。て。慰。ん。とい。ひ。堅。削。ら。ち。笑。ひ。て。師。父。の。弱。孝。順。る。丹。の。そ  
該。の。り。多。う。あ。り。時。を。殺。ま。ら。う。顔。を。相。一。相。て。又。櫃。の。藏。め。く。相。害。の。害。を。こ。ら。ひ。受。と。う。ち  
戲。れ。共。侶。の。身。を。起。し。櫃。の。櫃。太。緒。を。早。く。解。祛。て。蓋。を。開。け。徳。用。の。両。の。小。拾。る

雪吹姫と出ておま推居れば雪吹姫悲しき又朽惜き苦い涙玉成を不測の窮院  
のめいれね祖鑑屠所の羊の異なる身背の結紐られ膝の額を推當て只位  
沈みし徳用後より抱死起り仰反て髯蓬ける頼榻志言古甘慰れば堅  
削焦燥も推禁めて噫師の坊心鈍き連歌の附句をねも恋も無常も折あそらん  
去嫌ひる何いりやを疾腹と繕て去向とい死のひねと詞急迫く促す折る前画小  
繁き枯芒花の風吹ぬる熟耶々と戦く幸さるる堅削吐嗟と哀鳥死て其方と  
位と見り元い頭れ出来る那暴虎金毛白額鏡成ま眼の光凄しく爪を張り尾を建て  
走り鬼を勢ひ徳用も亦胆を淡して姫どうち捨身を起しや平片を鍊杖を握合ひて  
身と構れば堅削の鍊砲と早く其方へ推向て両九を撃つ發々々防を虎の物も甚堅削  
いよく恐れ慌て縁より檣と飛下て近づく虎を鍊砲と打拂ひ逃んと表けり虎の疾と箭の  
像く縦横無算の堅削と駈馳突覺僵して片足を帯と噬断す徳用の這光景小

逃とも逃さと思ひ一息持る鍊杖合直縁より閃りと跳り出て虎と迎へる尊棹系  
矢聲烈く修煉を盡して撃果さき欲されも虎の進退驪りる目今前小あ  
まされぬ馬とて後小あり只電光の晃く如く徳用が頭の上を飛越ると両三番蹴  
蹴る壞小徳用の眼眩く精疲れし西三步鈴打く程小鍊杖息哩と反預され慌て  
腰より戒刀を抜んとける右腕を只一口小噬断られ一聲苦と叫びも果を流る  
鮮血の蘇枋の場を敷ける小異なるも倍の大傷の小少選も咏うべ死のあがきま  
醫居小托地と脚空さる小背を撲して仆まけり介程小雪吹姫の憂が上る暴虎の  
暴虎小徳用堅削の既なる脚を噬喪れて死活の知らず仆まを見る堪馬の胸潰れて  
免るべくもあらぬ身の心神添ざるけし俯る隨小氣絶し七黑白も分ぎ做り多ひ  
あを虎の二見もろさ人身上り高き枯草の中に入りり忽然と那里とへく去りけり  
案下且説直塚紀二六の御高小親兵衛小邂逅を折早く政元の邸を退死出り那



八天傳乙昇卷二十八

三七

文英堂藏



八天傳乙昇卷二十八

文英堂藏

惡窮逢  
虎害  
天罰  
應

元慶三年  
七月  
北白川

三七

三條の客店へ赴き。則代四郎の對面きて。今日親兵衛の吩咐られたる言條々告知  
 きて。親兵衛が與る所の統扇をそが依遞與て。代四郎の飲ひ受て。隨即紀二六と  
 共侶の件の扇子を閉き見ると。背面の示さる細書あり。その書の略は今日も咱等左  
 京兆の需の応じて。白川山なる靈虎と對治の爲の曠昏より。那里の造り。求獵まは  
 かの奉へ。那燕丹が鳥の頭の白うと馬の角ある誓言の似て。我選る。宛時到れる飲尚幸  
 小と。姫神の買助より。成さ事ある。既小京兆の約束ごとく。徑小坂本小馳下りて。岐路を  
 安房へかへ。然れども。雙們の都て。我が山嶺を從ひ。そ。曩の紀二六の預け。管領家の木  
 牌とて。俱小幸崎の関を過り。又坂本も。うち過り。関の那方小我を待ね。我尙不幸小  
 虎の遇まへ。還る日。竟の有ら。ずと。夷齊が餓死子推が自焼の故するも。ある。宛欲尙亦  
 遇ふとも。及て。其果命と殞。其の胡慮する。然る時。雙の直塚と。親兵衛當共。信の  
 疾稻村歸り。参りて。我上竟の箇様々。と。兩館へ。吹え。上。便見。忠と。義へ。の。意。違

怨とせん。勿々不備とぞ示されける。代四郎是と。繰返し。看る。紀二六の悄語。を。那靈虎  
 支へ。世の風聲。を。咱等も。亦。知。ざる。然。覚。あ。る。勇。士。傷。戸。を。敢。て。征。む。と  
 る。及て。命と。喪。ふ。者。あり。遮。莫。和。子。の。神。々。の。性。も。曾。も。九。夫。の。あ。ら。は。し。不。加。る。の。仁。の。字。の。靈  
 手。あり。又。姫神の買助。あり。那虎不測の變化。も。必。對。治。せ。ら。れ。然。れ。ど。咱。等。這。里。に。在。り  
 る。其。山。嶺。と。外。小。見。て。去。て。坂。本。の。那。方。小。等。ん。や。の。又。什。麼。と。談。ま。れ。紀。二。六。答。へ。り  
 寔。小。介。之。愚。意。も。亦。相。似。す。小。父。十。一。郎。の。代。り。と。ま。の。地。小。留。め。ら。れ。る。小。信。折。の。伴。小  
 立。ま。い。小。父。の。與。小。面。伏。ゆ。く。素。食。の。人。小。る。と。み。る。れ。ど。も。主。の。教。ある。小。違。は。必。然。と。れ。ん  
 那。教。も。背。き。さ。る。小。愚。意。と。り。て。今。小。の。美。と。做。さ。ま。の。伴。當。若。黨。奴。隸。を。今。より。出。し  
 遣。し。て。坂。本。の。關。の。那。方。小。主。の。來。ぬ。と。み。る。へ。又。阿。史。と。小。可。の。五。個。の。親。兵。と。共。小。主。の  
 曠。昏。より。立。去。り。那。山。路。小。赴。死。す。度。跟。小。主。の。伴。と。せん。と。思。ふ。其。と。問。返。ま。を。代  
 四。郎。吹。つ。點。頭。て。其。誠。寔。小。志。く。候。べ。現。伴。當。の。要。る。け。れ。ど。も。和。子。の。鎗。と。鎧。櫃。ハ

これぞをえぬ。是隨身武具多れ必るくあるが。鎧山路の小心和郎預りて。ちがむ。鎧櫃の其  
 奴隷一名を留めて。馳見又殿兵。時宜依るも可らん。又と紀二六諾  
 る。高量早く果。六代四郎の邊。殿兵伴當們と皆召聚。方僅親兵衛が  
 紀二六とて。事の趣。固様々々。具不告。有候。殿兵五名。其の曠昏より  
 唯。俱白川山。赴。度。跟。主。伴。又。伴當們七八名。今。歇店。立。去。疾  
 近江路。赴。坂本の関。那方。留。主。余の支。候。木牌。の。鎧  
 鎧櫃。及。辛崎。坂本の関。過。折。那。果。関。令。質。向。固様々々。不。答。言  
 詳。諷。伴。若。黨。奴。隷。每。異。議。都。有。果。共。侶。我。們。下。司。九  
 とも。敢。命。惜。ひ。不。あ。む。遮。莫。山。路。の。伴。立。も。要。ら。ん。思。は。れ。開。存。右。仕。ら。ん  
 と。應。と。れ。殿。兵。們。の。鎧。櫃。の。故。と。其。一。人。を。残。れ。我。們。代。り。て。と。と。と。代  
 四郎。執。の。鏡。て。却。伴。當。們。の。盤。纏。と。令。せ。又。紀。二六。を。腰。の。帶。に。木。牌。を。伴。若。黨。の

逸與して。汝。北。白。河。より。辛。崎。越。致。路。遠。を。便。宜。な。れ。那。虎。の  
 害。怕。あ。れ。膳。所。瀨。田。の。湖。邊。出。て。早。那。関。越。今。未。牌。の。時。候。多。小。路。の。暮  
 る。争。何。せん。と。遣。立。れ。伴。當。們。思。ひ。ひ。ら。紀。二六。留。り。て。其。地。の。在。を。証。す。の。ミ  
 升。を。回。違。あ。ざ。れ。告。別。あ。退。り。猛。け。仍。装。を。各。早。く。教。正。て。皆。共。侶。立。出。け。り。畢。竟  
 代。四。郎。紀。二六。の。伴。當。們。と。出。を。遣。後。の。話。説。甚。麼。を。開。卷。を。更。て。且。下。の。回。解。分。を。聴。け。り  
 作者。云。是。も。の。下。大。江。親。兵。衛。が。虎。を。對。治。の。段。まで。又。意。思。楮。筆。を。費。し。七。十。數。頁。綴。る。ふ  
 中。其。其。域。不。至。か。う。既。の。佳。境。の。人。ら。ま。る。あ。其。段。及。及。う。作者。の。本。意。を。考。へ。も  
 開。校。の。書。肆。の。定。例。を。前。板。の。楮。數。の。多。を。教。る。れ。這。五。卷。を。下。帳。の。下。甲。平。七。則。上。梓  
 發。販。と。云。書。肆。の。好。い。儘。よ。う。餘。卷。結。局。續。て。出。予。水。滸。の。頻。單。の。假。子。自。王。國。の。多。た  
 虎。子。の。出。者。三。三。三。金。梅。及。本。は。是。已。趣。向。孰。も。異。ひ。七。相。犯。ま。る。を。著。官。先。是。年。查。ね

南總里見八代傳第九輯卷之二十八終

○曲亭公翁精編里見八代傳第九輯下帙之下甲號五卷工匠目次

出像畫工

卷廿四廿五  
廿六一頁  
卷廿六二頁  
廿七廿八

柳川重信



溪齋英泉



筆工淨書

卷廿四  
廿六廿七  
廿八下

白馬台音成

鏝廉吉

森田甲

橫田守

森田甲

常盤園

剖劔

○著作堂新編國字神史畧目

南總里見八代傳第九輯下帙之下乙號卷廿九第百四十六回より結局大國圓の巻

近世說美少年録第四輯第一輯より第三輯三回より十五卷皇表の所布一々のり

開卷敬馬寄俠客傳第五集第一集より第四集まで二十卷既刊布して編出せざる第五集第四十回以下五卷美少年録と共に刊布せざるなり

大阪

河内屋萬兵衛

東京

須原屋茂兵衛

同

伊丹屋善兵衛

同

山城屋佐兵衛

同

敦賀屋九兵衛

同

小林新兵衛

同

秋田屋太右門

同

丸屋善七

同

河内屋茂兵衛

同

和泉屋市兵衛

同

河内屋和助

同

須原屋伊八

同

秋田屋市兵衛

同

出雲寺萬治郎

同

出雲寺文次郎

同

椛屋喜兵衛

西京

村上勘兵衛

同

辺江屋半七

同

勝村治右衛門

同

長門屋龜七

同

杉本甚助

同

三家村佐平

名山閣

東京芝大神宮前書舖

和泉屋吉兵衛發售

